

## デュルケムの自殺論

### ★f(社会の状態) = 自殺率

デュルケムは社会が人間の外に存在し人間の行動を規定する力を持ったものにとらえ、社会の状態（固有の性質）が自殺率に影響を及ぼし、自殺は物のように観察可能なものと定義した。反論の余地は多少あるが、とても小さい例外しか存在しない、かなり普遍的に適用可能な理論である。19世紀中盤から国々は自殺率を統計で出しており、それらは比較可能なものである。

それ以前の自殺研究は医師たちによって精神病として扱われてきたが、デュルケムは様々なデータを用いて、自殺を説明する既存の非社会的要因に対して反論した。特に、自殺の原因を心理学的に説明するためにあげる個々人の動機は表面的な要因に過ぎないと批判し、自殺を個人の意識の問題として扱う心理学的説明を批判した。ある社会の中で男女の年間自殺100件あたりの各動機が該当する原因の割合が時代が変わってもあまり変化していない点と、最も大きな割合を占める動機の原因が国によって異なる点をあげ、人間の行動を規定する社会的要因が存在し、「自殺は個人的問題ではなく社会的問題である」と主張した。

自殺率は特定な属性によって左右される、つまり特定な属性を持った人が自殺しやすい-例えば、どの社会においても男性のほうが女性より自殺率が高い。カトリック教徒のほうがプロテスタントより自殺率が低い。そこには、ジェンダーによる社会的規範・期待が異なる、カトリック教徒のほうが社会的統合の度合いが高いというふうな社会的要因がある。

ヨーロッパ諸国の自殺率を比較し、時代が変わっても、自殺が多い国と少ない国が維持されている事は、社会が持っている固有な性質が自殺率に影響を与えるといえる。

### ★自殺の種類

#### 1. 自己本位的自殺

カトリック教徒が少ない社会は自殺率が高い（自殺率の高い順：プロテスタント>カトリック>ユダヤ教）。なぜ宗教によって自殺率が異なるのか、教義によるものか？という問いに対しては、ユダヤ教には自殺禁止の教義が確立されていない事から、教義と自殺率は関係ないと見た。デュルケムは「自由検討の余地」でプロテスタントとカトリック教徒を比較検討した。カトリック教において宗教は人間の選択以前の問題で、「与えられるもの」であり、プロテスタントは教会がなくなっても信仰を心の中に持つものとする。つまりプロテスタントのほうが精神的自由を持っていて、そのような要素が集団の性質を決めていく事にデュルケムは注目し、プロテスタントがカトリック教徒より社会的統合の度合いが低いと見た。

社会的統合の度合いが低いと、自分の存在を意味あるものにしてくれる他者との繋がりが弱まるため、孤立しやすく、「自己本位的自殺」が生じるのである。

#### 2. 集団本位的自殺

それに対し、社会的統合の度合いがあまりにも高くなる場合、個人より社会にもっと高い価値を置くため、「集団本位的」自殺が生じる。自爆テロや日本の神風特攻隊などが考えられる。

#### 3. アノミー的自殺

アノミー的自殺は、社会的秩序や規制のない状態において、急激な変化や自由の増大による不安定さによって生じる自殺である。

経済成長によって人々の就業する産業が変わっていき、都市化が進むにつれ、アノミー現象が現れる。産業化、資本主義経済の発展によって自己の欲望が肥大化してしまうもので、不景気より好景気のほうが自殺率が高い。どの社会においても商業に従事する人々の自殺率が工業や農業に従事する人より高いのが観察される。

またデュルケムは離婚の多い社会で自殺率も高く、それは欲求の流動化と不安定化によるも

のであると見た。(アノミー的自殺と自己本位的自殺はどう違うか?個人の欲求充足への関心の有無?)

